

東海道草津宿関係史料

(庄屋駒井与左衛門家文書) (一)

小林 博

東海道草津宿(滋賀県草津市)は、京都から数えて二番目の宿であり、そのうえ中山道の分岐(合流)点をなす重要な宿として江戸時代を終始した。この宿場の関係史料としては田中七左衛門本陣(木屋本陣)の数多い文書、問屋役を勤めた奥村孫十郎家の文書、同じく深尾又五郎家の文書などが知られている。木屋本陣文書は栗太郎志(大正一五)にかなり引用されているが、まだ完全な活字化はなされていない。深尾家文書も同様である。

しかし、奥村家文書だけは、その大部分が昭和三九年から四四年にかけて黒羽兵治郎(大阪府立大学名誉教授)によって「東海道草津宿史料」(奥村家文書)として二十三回にわたって大阪経済大学日本経済史研究所の機関誌に発表された。奥村家は黒羽教授の生家であり、そのため同家文書が教授によって活字化されることになったものである。

ところで今回「草津市史」の編纂過程で、新しく草

津宿庄屋駒井与左衛門家の文書が東京大学法学部法制史資料室にあることが判明した。この文書は駒井家十八代の駒井与左衛門が明治初年ころ代々の記録を書き写してまとめたもので十五冊からなっている。駒井家は脇本陣であり、その主は代々宿の役人を勤めた。与左衛門は嘉永六年問屋役見習となり以後宿の要務を勤め、慶応三年から庄屋本役に就任して明治二年まで勤め激動の時代を生き抜いた人物である。

本史料は奥村家文書とともに草津宿の歴史をみるうえで重要と考えられる。そこで、順不同であるが、この宿に接して流れる草津川(砂川)関連史料から発表していくこととした。

〔駒井家文書 十五冊ノ内九〕

(表紙)



一 申合證文

一 砂川筋近年土砂多下リ川底高罷成双方堤危其上所ニ出張申所在之ニ付双方水当所難儀ニ付此度和談之上方出張所を切取弱所越助川形罷成儀ニ正道を以致熟談立會定杭極申所相違之儀無御座然ル上者自今以後右定杭外江少茂仕出申間敷萬一自然出張所生出^(等)出来候ハ、立會遂見分切取少茂無理成を不申河形罷兩方之堤危儀無之様ニ可致相談事

一 兩方堤水当所在之ハ、抱のため定杭之内ニ而杭^(等)筋^(等)入申義ハ各別水除として定杭より川中江杭壱本

ニ而も打出申間敷ハ且亦河水出ハ節は葉竹を以水除之流シ^(等)入ハ儀者各別品かはりたる水除入ハ事仕間敷勿論大木なと伐込ハ更かたく仕間敷事

一 堤普譜之義双方入念可申ハ尤本堤者ら付仕可申ハ本堤より外江堤築出申間敷ハ更

一 川面ニ式尺廻リ以上之大木立置申間敷更

一 定杭川中之儀ニ付別紙双方連判之一通り致置事右之通相極申儀兩方 御領主御地頭表御役所迄奉伺御免之上双方致熟談相極申ハ得者村役人相替候共未々迄右之趣急度相用尤毎年正中ニ双方村役人共立會川通致見分定杭より外生出候ハ、切取定杭損扶ハ、川幅相改定杭不絶様ニ仕難波六ヶ敷義出来不申様可仕ハ尤堤普請之儀入念堤切無之様ニ可致ハ為後證同文言ニ而連印之證文壱枚宛致所持ハ所依而如件

元文^(四等)己未十一月

大路井村庄屋 清右衛門

同 善兵衛

年寄 佐兵衛

九左衛門

九左衛門

組頭

宇兵衛

治郎助

八良兵衛

市郎兵衛

草津宿庄屋

治郎八

六郎兵衛

年寄

助之丞

左右衛門

清右衛門

組頭

吉兵衛

源太郎

儀兵衛

六兵衛

各印形在

二 砂川河幅間尺定杭之事

川上より

壹番拾三間貳尺

三番拾三間

五番貳拾間一尺

七番拾五間三尺五寸

貳番拾三間四尺

四番拾四間五尺五寸

六番貳拾間三尺

八番拾三間壹尺

拾壹番拾貳間三尺

拾三番拾貳間三尺五寸

拾五番拾間

拾七番拾壹間壹尺

拾九番拾貳間五尺五寸

貳拾壹番拾六間壹尺

廿三番拾七間五尺

×貳拾四組

拾貳番拾三間貳尺

拾四番拾貳間

拾六番拾間貳尺五寸

拾八番拾貳間壹尺五寸

貳拾番拾貳間四尺

廿貳番拾九間四尺

廿四番拾五間五寸

右之通双方立會六尺五寸竿を以川流幅相極定杭打置ゆ
処相違無之然上者末々至迄右定杭急度相用可申ゆ萬一
朽損ゆ欲亦者出水之節拔流ゆハ、早速立會間數相改少
茂無相違定杭ヲ打壹本ニ而も我儘ニ打替申間敷ゆ尤河
筋熟談申合證文別紙在之ゆ定杭間尺立會相極申所相違
無之ニ付連判證文依而如件

年月同断

兩村共名前人数共
前證同断ニ付略之
名在印

三 六ヶ村申合證文支

一 砂川筋岡村領部田村領落合る草津領大路井村領東
海道渡り瀬迄之間双方大水之節水流よく堤切大破出

来不申様ニ仕度今般堤たいらニ在之ハ竹木草柳之類
追伐取其上川成見立双方無高下様ニ定杭を入申ハ勿
論双方共ニ堤之よわみニ相成不申様ニ立會見分和談
申上ハ定杭式ヲ通入置此定杭之内之竹木草柳也も伐
取可申ハたいら之儀ハ後々ニ至追鋤入申間敷也事

一 満水之節水除之義双方大木大流シホ入ハ得者難儀
筋ニ成申出出来申ハ間竹を以当分之水除入可申事

一 水除として杭箒(等)ホ川中江打出申間敷右之通六ヶ
村役人立會和談之上見分致相極メ申ハ上者双方申分
無之ハ然ル上者毎年八月中旬ニ何れも立會見分致此
定杭之内之竹木者不及申ニ何ニよらす若ハ(等)ホ出ハ
ハ、毎年伐取て可申ハ為後證六ヶ村連判仕者ヶ村老
杖宛同文言之一札并ニ定杭番附間敷帳巻冊村々取替
所持致也之処依而如件

但堤方跡杭迄ハ下地之談ニ川底より表定杭迄伐明
申答ニ極メ申ハ

明和元年

申十一月

岡村庄屋

忠兵衛

同村年寄

惣八

北小柿村庄屋

庄右衛門

同村年寄

吉右衛門

南小柿村庄屋

久平

同村年寄

与惣兵衛

大路井村庄屋

孫市

同村年寄

宇右衛門

追分村庄屋

徳右衛門

同村年寄

小作

部田村庄屋

平兵衛

同村庄屋

太兵衛

同村庄屋

勘兵衛

同村年寄

瓦右衛門

同村年寄

源兵衛

草津宿庄屋

半介

同

八左衛門

同所年寄

傳兵衛

同

九兵衛

同

忠右衛門

各在印

明和元年

六ヶ林取替

砂川定杭番附并間数帳

申十一月

四

一 老番定杭川幅式拾六間老尺七寸

但杭
杭造

表杭跡杭造間数五尺

部田村領

同断 間数五尺

岡村領

一 式番定杭川幅式拾老間六尺

但シ杭
杭造

表杭跡杭造間数老間

部田村領

同断 間数老間

岡村領

一 三番定杭川幅式拾式間五尺六寸

但杭
杭造

表杭跡杭造間数老間

部田村領

同断 間数老間

岡村領

一 四番定杭川幅式拾五間

但杭
杭造

表杭跡杭造間数式間

部田村領

同断

間数式間

岡村領

一 五番定杭川幅式拾三間

但杭
杭造

表杭跡杭造間数式間

部田村領

同断 間数式間

岡村領

一 六番定杭川幅式拾五間三尺

但杭
杭造

表杭跡杭造間数六間

部田村領

同断 間数三間

岡村領

一 七番定杭川幅式拾三間

但し杭
杭造

表杭跡杭造間数式間老尺

部田村領

同断 間数三間

岡村領

一 八番定杭川幅拾八間

但し杭
杭造

表杭跡杭造間数三尺

部田村領

同断 間数式間老尺

岡村領

一 九番定杭川幅拾四間四尺

但し杭
杭造

表杭跡杭造間数老間三尺八寸

部田村領

同断 間数七尺

岡村領

一 拾番定杭川幅拾四間三尺

但し杭
杭造

表杭跡杭造間数式間

部田村領

同断 間数五尺

岡村領

一 拾老番定杭川幅拾四間四尺

但し杭
杭造

表杭跡杭造間数三間式尺

部田村領

同断 間数六尺

岡村領

一 拾式番定杭川幅拾五間三尺

但し杭
杭造

表杭跡杭造間数式間老尺

部田村領

同断 間数五尺五寸

岡村領

一 拾三番定杭川幅四間五尺三寸 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数五尺 部田村領
同断 間数七尺 岡村領

一 拾四番定杭川幅拾四間四尺 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数卷間三尺六寸 小柿村領
同断 間数卷間半 追分村領

一 拾五番定杭川幅拾三間五尺三寸 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数卷間半 追分村領
同断 間数卷間半 小柿村領

一 拾六番定杭川幅拾貳間五尺八寸 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数卷間半 追分村領
同断 間数七尺 小柿村領

一 拾七番定杭川幅拾三間貳尺 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数卷間半 小柿村領
同断 間数卷間四尺三寸 追分村領

一 拾八番定杭川幅拾三間四尺 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数貳間 小柿村領
同断 間数貳間 追分村領

一 拾九番定杭川幅拾五間貳尺 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数貳間 大路井村領
同断 間数貳間 追分村領

一 貳拾番定杭川幅拾五間 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数卷間半 追分村領
同断 間数三尺 大路井村領

一 貳拾壹番定杭川幅拾三間 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数貳尺 大路井村領
同断 間数貳間 追分村領

一 貳拾貳番定杭川幅拾貳間卷尺 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数貳尺 大路井村領
同断 間数貳尺 追分村領

一 貳拾三番定杭川幅拾貳間四尺 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数四尺 大路井村領
同断 間数卷尺 追分村領

一 貳拾四番定杭川幅拾五間貳尺五寸 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数貳間 追分村領
同断 間数五尺 大路井村領

一 貳拾五番定杭川幅拾三間貳尺五寸 但し杭の杭迄

表杭の跡杭迄間数貳間 大路井村領
同断 間数貳間 草津宿領

岡村領部田村領の草津領大路井村領迄定杭番附

合式拾五番

但し杭間

卷番の貳番杭迄 三拾壹間

貳番の三番杭迄 三拾七間貳尺

三番の四番杭迄 貳拾五間三尺

四番の五番杭迄 四拾六間半

五番の六番杭迄 六間卷尺五寸

六番の貳拾五番杭迄者

貳拾間ニ卷本宛

右之通此度双方立會ニ而和談之上定杭入置申_レ上者毎年八月中旬ニ立會相改右之杭紛失致_レ欵_カ亦者朽損ニ_レハ、間数相改打直し可申_レ為後日番付定杭間数帳卷册ツ、取替依而如件

年月同断

六ヶ村共名前人数とも

前證之通ニ付略之

各在印册

但前證此册とも宛名なし

五 一札之事

一 桐生村之流砂川筋馬場村岡本村堤筋近年双方_ノ猥ニ川中江杭木打出申_レニ付自然満水之節川切_ル在_レ之_レ而者部田村追分村草津宿者勿論下郷村々之難洪ニも相成_レニ付此度部田村追分草津右三ヶ村役人中立會馬場村岡本村兩郷江懸合對談之上川中間数相定左右ニ定杭入_レ上者以来右定杭_ル聊たりとも杭木打出申間敷_レ尤右定杭_ハ三尺通上宅刈取可申_レ且亦毎年正月に馬場村岡本村双方役人立合見分之上川筋順廻し砂溜り_レ所切上ヶ可申_レ其外堤筋普請場様子見糺し修覆可仕_レ為後日連印一札依而如件

寛政九丁巳年

六月

馬場村庄屋

太右衛門

肝煎

七左衛門

百姓惣代

源右衛門

岡本村庄屋

吉兵衛

肝煎

作左衛門

百姓惣代

権右衛門

右之通一統立會對談相調_レニ付為後日之奥印仍而如件

部田村庄屋

平兵衛

太兵衛

追分村庄屋

清右衛門

草津宿庄屋

孫右衛門

八郎右衛門

右各在印

宛名なし

帳上書 文化十四丁丑年三月

六 砂川筋定杭為取替帳

草津追分領境

宍番定杭 川幅 九間

右宍番の式番迄之間數三拾間四尺三寸

二番定杭 川幅 十間三尺八寸

右二番の三番迄之間數廿一間五寸

三番定杭 川幅 拾卷間

右三番の四番迄之間數三拾六間式尺下

東海道渡場

四番定杭 川幅 拾六間五尺四寸

右四番の五番迄之間數三拾間式尺三寸

五番定杭 川幅 拾六間七寸

右五番の六番之間數三拾六間四尺

六番定杭 川幅 拾九間式尺六寸

右六番の七番之間數拾九間式尺六寸

七番定杭 川幅 拾卷間四尺式寸

右七番の八番迄之間數式拾三間七寸

八番定杭 川幅 九間三尺五寸

右八番の九番迄之間數式拾六間卷尺

九番定杭 川幅 八間四尺四寸

右九番の拾番之間數拾六間

拾番定杭 川幅 八間三尺八寸

右拾番の拾壹番迄之間數廿三間三尺八寸

拾壹番定杭 川幅 拾卷間五尺四寸

右拾壹番の拾貳番迄之間數廿五間四尺式寸

拾貳番定杭 川幅 拾間式尺五寸

右拾貳番の拾參番迄之間數拾八間式尺八寸

拾參番定杭 川幅 八間三尺二寸

右拾參番の拾肆番迄之間數三拾九間七寸

拾肆番定杭 川幅 八間三尺七寸

右拾肆番の拾伍番迄之間數三拾三間五寸

拾伍番定杭 川幅 拾式間

右拾伍番の拾六番迄之間數三拾八間

拾六番定杭 川幅 拾卷間三尺九寸

右拾六番の拾七番迄之間數廿四間卷尺

拾七番定杭 川幅 拾式間卷尺

右拾七番の拾八番迄之間數十四間卷尺

拾八番定杭 川幅 拾式間六寸

右拾八番の拾九番迄之間數廿七間式尺

拾九番定杭 川幅 拾三間卷尺卷寸

右拾九番の式十番迄之間數拾九間四寸

式拾番定杭 川幅 拾式間卷尺七寸

右式拾番の廿一番迄之間數廿一間八寸

廿一番定杭 川幅 拾貳間三尺

右廿一番の廿貳番迄之間數三拾三間貳尺

廿貳番定杭 川幅 拾壹間壹尺八寸

右廿二番の廿三番迄之數廿九間五尺五寸

廿三番定杭 川幅 拾三間四寸

右廿三番の廿四番迄之間數三拾五間

廿四番定杭 川幅 拾貳間貳尺三寸

右廿四番の廿五番迄之間數廿三間四尺五寸

廿五番定杭 川幅 拾三間

右廿五番の廿六番迄之間數廿七間

廿六番定杭 川幅 拾貳間三尺三寸

右之通此度双方役人立會熟談之上相互ニ川並出張(等)木伐取番の廿六番迄之間數相定垣付ニ定杭打置申上者毎年三月三日定日相極メ置双方立會右之間數相改メ定杭之外者竹木(等)無違背伐取可申管ニ致儀定後日双方申分爲無之爲取替置の所仍而如件

但此度相改申の定杭間數之義此後出水之増様ニ寄川瀬突当危急之場所出来候ハ、双方役人立會熟談之上堤筋丈夫ニ相成の様互ニ助合修覆可致ハ尤其砌熟談之上ハ定杭打直シの義も可在之衷

文化十四年

丑三月日

大路井村

庄屋甚右衛門

年寄善右衛門

草津宿

庄屋

山内半介殿

高田治郎八殿

問屋

宇野源右衛門殿

年寄 森田庄兵衛殿

七 一札之事

右別紙一札也

一 砂川筋通水為宜敷出張の垣切込定杭相立候得共川土手も出張の所御互ニ欠取可申管ニハへ共右普譜ニ付此後川瀬突当と如何可相成難斗の問土手分ハ其儘差置猶出水在之突当の様子且手薄キ場所(等)見合危ヲ儀無之様御相談申追而欠取可申段御互ニ申合置のニ付為取替一札依而如件

文化十四年

丑三月

前同断

役人

東海道草津宿關係史料 (小林)

大路井村領野村領境貳拾六番杭より

野村領壹番杭貳拾十三間

一 壹番定杭 巾九間壹尺六寸

一 貳番定杭 貳番疋間數拾四間五尺

一 三番疋間數拾七間 巾九間壹尺三寸

一 三番定杭 巾拾間壹尺七寸

一 五拾四間五尺

右之通三本宛杭打置

草津領 三本

大路井領 三本

六本

草津宿

年寄庄兵衛

同 亦兵衛

野村庄屋久弥悴

千治郎

右野村立會定杭取替も一札なし杭木打

八 天保六年八月御公役様御出ニ付砂川浚宿方御願申上

願申上

表紙包書付

未九月草津宿砂川浚御普請之儀大久保加賀守様江御願書被差出置

所申五月二日御書取を以御願之趣難被及御沙汰旨被

仰渡御願書御戻相成石川陣左衛門請取

御願書御書取之写

私領分東海道草津宿添字砂川之義前々手銀を以浚方申付候得共連々川床高相成度々堤筋切取出来既享保年

申出水之節者宿駅其外民家及流失ハ義御座

所去ル丑年御入用を以浚方御普請被

仰付

後御蔭を以水災相通儀於私難有仕合奉存候得共其後弥無油断年々手入普請申付候得共水元何レ茂砂山ニ而聊之出水ニ而茂度々之儀砂石夥敷流出ニ付亦々以前之通押埋當時ニ而者人家

茂川床高ク相成此上出水相重

者乘越且切入可申哉

と甚心痛仕

自然冥変之義御座

而者難決之義者不及申御用向御差支ニ茂相成何分恐入候義御座

得者精々手入仕候得共宿廻前後町教長不容易儀ニ

處元來私勝手向不如意之上近来打續両度居屋敷不殘類焼仕其上早々無余儀物入在之且一昨巳年領分違作猶亦当年同

様違作ニ而因窮仕詰此上土砂浚之義者迎茂難及自力御座

間何共恐入奉存候得共格別之以御憐愍砂浚御普請被

仰付被下置様仕度此段奉願

尤此度海道筋道橋宿廻御普請其外見分間御用御勘定米野弥兵衛支配勘定

本山幾治郎并ニ御普請役一同先月中旬領内通行之節石砂川押埋奉願御場所且是迄年々手入普請之増様ホ及見儀於在所申立并宿方ホも御普請之儀相願ホ處一同場所及見在之ホ通之儀ニ御座ホ間何卒格別之御仁恵を以願之通被 仰付被下置ホ者重疊難有仕合奉存ホ以上

九月廿八日

御名

御書取

九 書面御普請願之儀難被及御沙汰ホ事

別紙奉願ホ草津宿砂川押埋浚方之儀自力ニ難及捨置ホ而堤切入ホ得者同宿其外村々亡所ホも相成程之義ニ付去文政七申年九月萬石已上之分者堤川除修復ホ自力ニ而普請可申付旨被 仰渡後同十二月丑年海道筋御普請御入用之内江御組入後御普請仕候得共年々砂石夥敷押出亦々以前之通危急体ニ相成ホニ付格別之浚方不仕ホ半而者浚方難相成ホ所容易之儀ニ無御座ホ茂私力ホニ者難及御座ホニ付御時節柄奉恐入ホ得共前書先例も御座候得者何卒格別之御憐愍を以願之趣御取扱偏奉願ホ已上

九月廿八日

御名

右之趣申五月廿九日膳所於御役所御達被遊候事

一〇 乍恐奉申上口上書之事

一 当宿字砂川之義水上皆砂山ニ而出水之度々砂流出候義夥數年々川底高く相成ホニ付御上様ホ毎々御普請御手当被図 成下難有仕合奉存候然ル所当春已来其儘降続去ル六月巳之刻満水ニ而水かれ宍丈斗高ク水相成ホニ付東海道中仙道両渡場関板三枚関上ケ前通りハ土俵ニ而式俵并ニ積上ケホを水勢ニ而倒レ杭木竹を以相防堤筋ホ水含ニ而水吹出し亦ホすり落ホ場所多出来杭木竹土俵ニ而相防老若者勿論防方之者迄通行者を引留メ防方為致ホニ付漸々其場相凌ホ其節之心勞者奉申上ホ様も無之數度之義ニ御座ホ当出水無之間も無御座ホ故數年之土砂夏中流出式尺斗茂川底高く相成亦ホ去ル十三日風雨敵敷満水仕前書奉申上ホ通リ相防既ニ切落ホ危急場所出来ホ所色々ホと手配仕相防ホ義全

御上様より段々と御手当被為 成下置ホ義と難有奉存ホ何分此後之所防方甚以六ヶ敷難涉迷惑仕候防方術尽堤切落ホ義出来ホ時者最早一宿滅亡仕ホ義も眼前之義と奉存ホ得者宿役人者不申及宿内一同日夜心

痛御座候右之段乍恐御届書を以出水始末奉申上上巳

天保七丙申年

八月十七日

草津宿

年寄亦七

庄屋助役

竹村甚七

庄屋

山内半介

御奉行様

「右者江戸表の西原様江砂川様子御尋ニ付郡方御役所の書上候様被 仰出候ニ付如此」

一 乍恐奉願上口上書之事

一 当宿砂川の義年々土砂夥敷流出ニ付出水毎々川底高ク相成ゆ故是迄毎々格別の御手当被為 成下ゆ得共何分川上桐生村山々の義其外山と者違立毛無之砂山ニ而追々土砂流出川底高く相成ゆニ付昨冬土砂留被 仰付と而字雨堤川ニ而三ヶ所積立ゆ所余程土砂留リ右川筋殊之外川底深ク相成申ゆ間当夏川添村々芝伏七仕候得者何分多分谷山ニ御座ゆ故行届兼ゆ

而此節川添村之申談大川筋川上ニ而字天白川と申場所ニ而砂留普請取掛リ居申ゆ義ニ御座ゆ右ニ付而者桐生村中ニ御座ゆ御田地凡弍町四五反斗此御高三拾石之場所出而低見之地面ニ而込所御座ゆ間右地面江川上ニ而切落し仕候得者土砂流込川下江者自然土砂出不申清水斗リ流落ゆ様相成候得共出水度毎川底深ク相成自分出水之愁も無御座候間甚恐多御願ニ御座候得共切落被為 仰付被下置ゆ様奉願上ゆ右御田地代リ地面之義者はまで通水之川筋余程手廣之地面ニ御座ゆ尚亦山手之義ニ御座ゆ間地廣ニ而開発場所も多分御座候様奉存候故乍恐御見分被為 成下候而右願之通御殖濟被為 成下ゆハ、宿方者不及奉申上ゆ川添村々迄廣太之御仁恵と如何斗難有仕合ニ可奉存候已上

弘化四未年

九月十三日

草津宿百姓惣代

年寄

駒井鹿治郎

深尾亦七

間屋

辻重兵衛

東海道草津宿關係史料 (小林)

御奉行様

庄屋
山内孫右衛門
竹内甚七
高田治郎八

- | | | | | | |
|----------------|----------|-------|----|----------|-------|
| 下段 | 一 四間四尺式寸 | 弥市 | 下段 | 一 四間三尺七寸 | 助右衛門持 |
| 同 | 一 五間式尺式寸 | 善吉 | 同 | 一 四間三尺七寸 | 権兵衛 |
| 下段 | 下段式段共同様 | | 下段 | 下段式段共同様 | |
| 一 | 四間壹尺式寸 | 儀助持 | 一 | 四間三尺式寸 | □助持 |
| 下段 | 一 四間三尺九寸 | 利右衛門持 | 同 | 一 四間三尺式寸 | 竹藏 |
| 同 | 一 七間式尺八寸 | 善平持 | 同 | 一 四間三尺式寸 | 亥七持 |
| 下段 | 下段二段共同様 | | 一 | 四間三尺七寸 | 源藏持 |
| 一 | 七間五尺八寸 | 甚七持 | | | |
| 二段目 | 一 七間尺八寸 | 善七 | | | |
| 下段但し四間者在来石垣也 | 一 三間六寸 | | | | |
| 右東横町合百八拾三間式尺六寸 | | | | | |

内
百八間下段此人足式百十六人
七十五間半上段此人足七拾五人半

一 二 乍恐奉願口上書

一 当宿西横町東横町砂川裏堤前々々七ヶ年ニ老度宛御普請被成下候所弘化三丙午年御聞濟ニ相成御普請被成下其後年限ニ相成御願申上度存居候處一作丑年大早魃ニ付乍恐 御上様ニ茂御物入多御義ニ存知御願申上にも恐多其後所之地普請取繕来此處此度強風雨ニ而存外大水所之泥水吹いたし驚入種々防水仕漸々相凌申も早速見改仕も處杭柵共不殘朽損寂早此上出水仕候ハ、迎も防方出来不申宿内一統流出眼前と存心痛不少之義ニ御座も依之左ニ積リ書奉備御高謔も何卒御見分之上御普請被為 成下候様奉願上も右願之通御聞濟被成下も半ハ一統安心冥加至極難有仕合可奉存も已上

西横町堤裏普請積書

一 明テ七尺杭五百四拾本

内百三拾本古杭を相用

残り四百拾本入用

代老貫百四拾八匁 但し老本ニ付式匁五歩宛

一 同九尺杭五百四拾本

内百本古杭を相用

残り四百四拾本入用

代耆貫五百四拾匁
但し耆本ニ付
三匁五分宛

一 柵竹 九拾駄

代式貫式百五拾匁
但し耆駄ニ付
廿五匁ツ、

一 繩目方式拾貫目

代拾式匁
但耆貫目ニ付
六歩

一 人足三百七拾七人半

代九百四拾三匁七歩五厘

但し耆人ニ付
式匁五分ツ、

一 五貫八百九拾三匁七歩五厘

東横町堤裏普請積書

一 明テ九尺杭三百六拾八本

内五拾本古杭を相用

残リ三百十八本入用

代耆貫百拾三匁

一 同七尺杭三百六拾八本

内六拾八本古杭を相用

残リ三百本入用

代八百四拾匁

一 柵竹六拾耆駄

代耆貫五百式拾五匁

一 繩目方拾三貫五百目

代八匁耆歩

一 人足貳百九拾耆人半

代七百式拾八匁七歩五厘

一 四貫式百拾四匁八歩五厘

内柵貫ニいたしゆハ、

七百九拾匁相減申ゆ

二口合拾貫百八匁六歩

内柵貫直違

耆貫九百六拾式匁

右之通ニ御座ゆ以上

安政貳卯年

八月

郡方御役所江

百姓惣代

長治郎

年寄

八十右衛門

同 三尾□兵衛

庄屋助役

須左美沖右衛門

庄屋

高田真太郎

御奉行様

同

田中平右衛門

右之通願書高田真太郎持參御月番慶庭嘉左衛門様江御願
申上ゆ處御見分成下ゆニ付辰二月十六日より普請ニ取懸
り金入用左之通

明テ丈杭大四百式本高田儀助渡 明テ九尺中式百式本田中七左五門渡
一 壹貫四百七匁 一 五百五匁

同七尺大四百七拾三本同人渡 同壹間小式百本同人渡
一 壹貫百三拾五匁式步 一 三百六拾匁

式間貫ニ式百四十三丁同人渡 同大百五拾本同人渡
一 式百四拾三匁 一 三百七拾五匁

丈貫百五丁同人渡 式間貫キ百廿八丁同人渡
一 百五匁 一 百四拾七匁式步

柵竹百三本代 柵竹廿駄代東丁佐七渡
一 三拾八貫六百廿四文 一 金四兩貳分三朱

伊助裏ノ東海道口迄 請負之場出来出精ニ付心付
受負貫銀東丁茂右衛門渡 一 三拾六匁三分五厘

中山道口ノ庄三郎持勝二郎裏迄 一 五百四拾三匁六步五厘

雇人足一日夫之内役九百七十二分 一 六拾貫七百四拾八文

右合銀ニ而六貫貳百貳拾壹匁九步貳厘

右願高之内江凡五分通と見被下置匁分

銀貳貫三拾五匁卯十二月廿二日被下置候
同貳貫三拾五匁辰三月十五日被下置候

メ四貫七拾匁

差引

金四兩貳分三朱

銀七百八十七匁四步

錢九拾九貫五百六十二文

右之外

一 一百八拾五匁六步

一 五拾四匁壹步三厘

右式ツ共辰十二月三日市兵衛相渡

西様町市兵衛裏下段在米石垣ニ
在之處今般上段長三間石垣ニ仕
度旨願ニ付手当いたし遣
西横町元口裏前同様願ニ付
手当いたし遣

一三 近来砂川堤筋あらしゆ者在之其段御願申上候所

左之通建札いたし可申旨安政四巳年閏五月廿五

日被 仰付製作之上六月十九日建之

御普請所宿囲堤筋あらしゆ者在之者捕置訴出へし

東海道口西之堤ニ壹本

中山道口西ノ堤ニ壹本 此式本者長貳間五寸角也

金勝川 打合壹本

桐生川 境ニ壹本

部田村 境ニ壹本

追分村 境ニ壹本

英津宿 境ニ壹本

草津宿 境ニ壹本

此四本者長貳間四寸五分角

右建札被 仰付_レ節近年毎々宿方_ノ修覆致_シル處兎角堤筋あらし杭柵折取且竹木_ノ代取除堤筋危急ニ付今般建札申付候間若心得違之者在之_レハ、早々注進可致旨被仰付候事

一四 乍恐奉願口上書

一 当宿西横町東横町砂川裏堤前々々七ヶ年ニ老度宛御普請被成下_ル處安政貳卯年御聞濟ニ相成御普請被成下其後年限ニ相成御願申上度奉存候へ共何分

御上様ニも色々御物入も被爲統_レ段奉恐察及丈々者自普請取繕居_レ得共_最及早及大破_レニ付先月大水之節所々泥水吹出既ニ危相見江申_レ所折節引水ニ相成漸々凌方相付申_レ得共何分此上者取繕而已ニ而難相凌奉存_レニ付何卒御見分之上御普請被成下_ル様偏ニ奉願上候乍恐左ニ入用品積書奉備御高覧_レ

西横町裏堤普請積書

一 檜丸太老丈杭 三百五拾六本

一 柵竹五拾七駄 老駄ニ付 代貳貫五百文宛

一 此代百四十貳貫五百文

一 □目方貳拾貫目 老貫目ニ付 代貳百文ツ、

此代四貫文

一 人足四百十式人 老人ニ付 代五百文宛

此代貳百六貫文

杭三百五拾六本

錢三百五拾貳貫五百文

東横町裏堤普請積書

一 檜丸太八尺杭 三百八拾八本

一 柵竹三拾駄 老駄ニ付 代貳貫五百文宛

此代七拾貫文

一 繩目方拾老貫五百目 老貫目ニ付 代貳百文宛

此代貳貫三百文

一 人足貳百九十老人半 老人ニ付 代五百文宛

此代百四十五貫七百五十文

合五百七拾五貫五百五拾文

杭七百四十四本

右之通りニ御座_レ已上

下丁紙ニ而

西横町裏堤

一 九拾四間

但シ高サ四尺老間ニ付金老兩式歩ツ、

東横町裏堤

一 九拾三間半

但シ高サ三尺老間ニ付金老両老步ツ、

右之通右掛ケ之見積リニ御座ル己上

慶応元丑七月

百姓惣代

宇野和吉郎

年寄

常治郎

同

八田茂八

同

辻五郎兵衛

□□元メ

山内孫右衛門

庄屋

駒井與左衛門

同

高田義助

御奉行様

下ケ紙ニ而相願上ル右掛ニ而御聞濟ニ相成申ル当丑年
ノ三ケ年ニ割合御普請ニ取懸リ可申之御達シニ相成御
見分者御用金百両之御借リ講御用ニ而御廻村之節願書
差出シ申ル

御見分被下ル御役之左ニ

御元メ

郡御奉行
神谷兵左衛門様

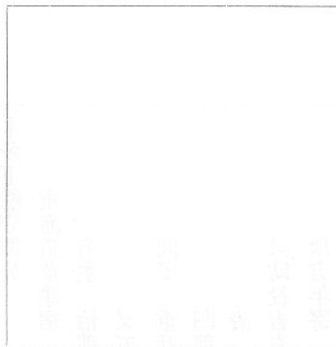
保田秀之輔様

御吟味役
堀池貞藏様

御地方

森善次郎様

(裏表紙)



〔駒井家文書 十五冊ノ内八〕

文政十一戊子年九月出願ヨリ

翌己丑年春 川浚成就

翌之庚寅年二月御褒美御普被為下置候

書記等

一五 砂川浚一件 留記

乍恐以書付奉願上候

本多下總守領分東海道草津宿役人共一同奉申上候 當宿之儀者宿端有之砂川土砂夥敷流出候ニ付川床高く相成往古より式三拾ヶ年程経候得者極而堤切落難渋之宿柄ニ御座候 既ニ近来者宝曆六子年天明元丑年享和二戌年与打続水難有之其節之儀者堤筋敷拾ヶ所切落宿内一同流家潰家出来宿内之者不及申旅人ニ至迄夥敷流死仕既ニ一宿可及退転之處御公儀様并御領主より厚御手当被成下候ニ付漸取続者仕候得共宿方困窮之儀未建直リ不申毎難渋御救之御歎訴申上奉恐入候族ニ御座候得者此上水難等御座候而者必至難渋相成候義ニ御座候 然ル處右砂川切所毎ニ川外へ土砂発出シ候故其後暫之所者川床深ク通水宜敷候ニ付無難ニ罷在候得共追々土砂下リ又又川床高く相成候ニ付年々御領主へ相願川浚并堤嵩置等仕候得共何分草木無之山手より流出候ニ付出水毎ニ土砂夥敷落出候故當時ニ而者享和度水難已前より者川床莫大高く相成最早式拾七ヶ年も相立候事故當時ニ而者格別之大雨ニ無御座候共水高高く川堤危相成候ニ付諸家様御宿式者御状箱奉至來候節抔出水仕候砌者隣村江御立退等之儀ニ役人共殊之外心勞仕候儀毎毎之儀ニ御座候 別而当春以來度々大雨ニ而出水危急成儀折々有之難渋仕候尤川之左右ニ当宿之外多

領打交拾九ヶ村相添有之右村之者共此節も打寄種々相談仕居候處当夏以來東筋洪水之趣承り弥以恐敷奉存候得共迎も私共之勘弁ニ不能当惑仕歎ヶ敷奉存候所此度為御用被為遊御越候ニ付此段不恐願御愁訴奉申上候何卒格別之御慈悲を以て此後水難無之様之御手当被為成下候ハハ一同難有仕合可奉存候以上

文政十一子年九月

本多下總守領分

東海道草津宿

名主 治郎八

又五郎

問屋 重兵衛

四郎兵衛

清助

同助役吉右衛門

地方年寄

嘉兵衛

甚七

同助役勘右衛門

年寄 勘十郎

藤十郎

庄兵衛

米野弥兵衛様

黒川織三郎様

砂川浚御普請目論免御覚

字砂川

川上桐生村と打合迄

一 三千四百八十四間卷尺

但 桐生村

岡本村

馬場村

山寺村

部田村

字金勝川

川上上戸山村と打合迄

一 貳千五百七十五間五尺

但 上砥山村

下戸山村

川辺村

坊袋村

目川村

岡村

字砂川

金勝川打合と湖水迄

一 三千七百貳拾間三尺

部田村

岡村

小野村

追分村

大路井村

草津村

野村

上笠村

木ノ川村

下笠村

北山田村

ノ九千七百八拾間三尺

此坪九萬七千八百五坪

但し川幅平均十間深六尺之積

此人足拾九万五千六百人

但し老坪ニ付式人掛り之積り

此賃銀三百五十貳貫九十八匁也

但し老人ニ付老匁八分積り

此金五千八百六十八兩老分永五拾文

桐生山東谷

一 砂留 老ケ所

中廿一間
厚サ三間
高サ老間

同所

一同 卷ヶ所 中十貳間
高サ貳間

一同 卷ヶ所 中十五間
高サ貳間

桐生山藤南谷

一同 卷ヶ所 中七間
厚サ貳間
高サ卷間

右坪ノ百十四坪

但卷坪ニ付三十人之積リ

此人足三千四百廿人

此賃銀六貫百五十六匁

此金百貳丙貳步永百文

文政十一子年九月

草津宿

問屋

申渡

此度五街道筋出水ニ付往還道橋宿囲其外破損之場所
為見分御勘定米野弥兵衛支配勘定黒川織三郎江御普
請役相添被差遣候旨水野出羽守殿被 仰渡候依之御
領分宿村々も見分可致候間諸事差支無之様可被取斗
旨可被申渡候

一 右為御用兩人罷越候節東海道三嶋宿者惣助郷村
々之内村役人も兩人ツツ其宿々江罷出候様可致候
右之趣岩瀬伊豫守

石川主水正申達

子八月十二日江戸御出立

御勘定 米野弥兵衛様

支配勘定 黒川織三郎様

御普請役 門原道右衛門様

川嶋小七郎様

下妻市藏様

梶山鉄六様

高津八十之丞様

右九月十一日水口御立草津御泊砂川浚出願ニ付問屋重
兵衛閑宿迄罷出願書差出候處見分可致様被仰付候ニ付
岡村打合々南堤案内致し尾丸堤へ御出御見分相濟御着
見積リ書大津御泊所へ持参之趣被仰付候

子九月御勘定御普請役為御見分御越之節差出候積書

砂川流間数

一 四百拾間

山ノ谷 桐生村

一 貳百四十拾間

一 六百七拾七間四尺 岡本村

- 一 千貳百八拾三間 馬場村
- 一 五百六十八間三尺 山寺村
- 一 三百五間 岡村
- 打合辻
- ノ 三千四百八十四間壹尺
- 一 四百八拾間 部田村
- 一 内三百五間打合ノ上分引
- 一 貳百四十三間三尺 追分村
- 一 七百貳拾九間 草津宿
- 一 千百拾八間 木ノ川村
- 一 千四百五拾五間 北山田村
- 打合ノ湖水辻
- ノ 三千七百貳拾間三尺
- 金勝川
- 一 七百八拾間 上砥山村
- 一 九百四間 下砥山村
- 一 百八拾間 川辺村
- 一 五拾八間五尺 坊袋村
- 一 四百七拾五間 目川村
- 一 百七拾八間 岡村

上砥山村ノ打合辻

ノ 貳千五百七拾五間五尺

合九千七百八拾間三尺

但川幅平均拾間深サ六尺之積リ

此砂坪 九万七千八百五坪

老坪ニ付貳人掛リ之積リ

此人足 拾九万五千六百拾人

老人ニ付老奴八分宛

此賃銀三百五拾貳貫九拾八匁也

此金 五千八百六拾八兩壹分

永五拾文

桐生山麓東谷

一 砂留 老ヶ所

幅貳拾老間

厚 三間

高 老間

此石坪 六拾三坪

同所

老ヶ所

幅 拾貳間

厚 貳間

一同

高 卷 間

此石坪 貳拾四坪

同所

卷ヶ所

幅 拾五間

厚 貳 間

高 卷 間

此石坪 三拾坪

南谷

一 同 卷ヶ所

巾 七 間

厚 貳 間

高 卷 間

此石坪 十四坪

石坪ノ百拾四坪

卷坪ニ付三拾人積リ

此人足三千四百貳拾人

此賃金六貫百五拾六匁也

此金 百貳兩貳分

永百文

右積リ書大津御泊リ所へ持參致候

御勘定 米野弥兵衛様

支配勘定 黒川織三郎様

御普請役 門原道右衛門様

川嶋小七郎様

下妻市藏様

高津八十之丞様

右九月十一日水口御立草津御泊十一日大津御逗留

丑三月江戸御留主居へ被仰渡候書付之写

申 渡

御領分東海道宿村々之内道橋宿囲其外御入用を以御普請被 仰付候旨水 出羽守殿被 仰渡候ニ付為仕立御勘定米野弥兵衛へ御普請役相添被差出候間諸事差支無之様可被取斗旨可被申渡候右之趣岩瀬伊豫守曾我豊後守申達候

丑 正 月

正月廿七日江戸御出立

御勘定 米野弥兵衛様

御普請役 門原道右衛門様

格 桑田歳之丞様

見習 下妻市藏様

代リ 河嶋鉄太郎様

二月十一日当宿御立候而問屋重兵衛岡崎宿迄御出迎
ニ罷越十八日帰宿

一 御小人目附鈴木金十郎様御普請所為御見廻り御越
十九日水口立当宿御泊りニ付岡村迄御出迎夫々砂川
筋御案内之事 御宿油屋孫十郎

一 同 渡辺雄右衛門様右同断廿日土山御立当駅御泊
り御越御一統と御宿へ御入被被成候

一 同 岡本与十郎様廿一日水口御立当宿御泊り

一 御地方鈴木覚右衛門様

廿一日ニ御出

御目付中根梯三郎 様

一 郡奉行戸田二郎様 廿一日御出

一 御勘定米野弥兵衛様

御普請役桑田歳之丞様

下妻市蔵様 廿二日愛知川御立当宿泊り

一 御普請役門原道右衛門様

川嶋鉄太郎様 同日土山御立草津御泊

一 廿三日御勘定役様御普請役様砂川御見分中仙道口

へ川下木ノ川境へ定杭打始メ川上へ打合迄百間之都
合十五間ノ廿一間半都合千三百廿一間半

一 廿四日 米野弥兵衛様

門原道右衛門様

下妻市蔵様

右御三人東海道へ御越被成候

去子年砂川一件入用割合不参之分

一 追分村 一 桐生村 一 大路井村

一 山寺村 一 上戸山村 一 小柿村

一 下戸山村 一 川辺村 一 野村

一 坊袋村 一 目川村

草津領之分

追分村境へ東海道口迄

一 八拾八間

東海道口へ中山道口迄

一 貳百九拾三間

中山道口へ木ノ川境迄

一 三百四十八間

ノ七百貳拾九間

砂川浚御普請被仰付候ニ付

一 洌浚長八百廿一間

平均深四尺、床四間半、上口七間

此砂利三千百四拾七坪貳合

一 洌浚長五百間

平均深貳尺五寸 床六間 上口七間半
此砂利千四百六坪合

貳口砂り四千五百五拾三坪四合

人足貳万五千四拾三人七分

但浚耆坪五人五分懸り

賃 永四百廿五ノ七百四十貳文九分

但耆人永拾七文

合金四百廿五兩貳分

永貳百四十貳文九分

三月廿日皆出来日限證文差上候

長サ耆間

巾上口七間半

床六間

深サ貳尺五寸

平均

六間七分五打

此本坪貳坪八合耆勺貳五

長サ耆尺 此人足耆人

長サ耆間

巾上口七間

床四間半

深サ四尺

平均

五間七分五打

此本坪三坪八合三勺三三

長八寸 此人足耆人

耆人ニ付錢百六十文 黒鞆渡し本坪共銀三百三十文

御料理代

一 貳百拾八匁三分 鈴木覚右衛門様書付出ス

二月廿六日御普請初り

川添村出人足覚書上

字桐生

一 百八十人 部田村

一 九拾人 山寺村

一 九拾九人 岡本村

一 百五人 馬場村

一 百八拾人 桐生村

ノ六百五拾四人

右者桐生川金勝川添村之分書面之人數三日ニ割合罷
出し候

字戸山川

一 八拾耆人 岡村

一 百拾四人 目川村

一 八人 坊袋村

一 七拾貳人 川辺村

- 一 百貳拾人 下戸山村
- 一 百八拾人 上戸山村

ノ 五百七拾五人

右者戸山川添村之分書面之人夫三日ニ割合罷出候

- 一 九拾人 野村

- 一 百廿人 上笠村

- 一 百八拾人 木ノ川村

- 一 貳百拾人 北山田村

- 一 貳百七拾人 下笠村

ノ 八百七拾人

右者砂川添村之分書面之人夫日數三日ニ割合罷出候

- 一 五拾老人 追分村

- 一 六拾人 小柿村

- 一 九拾人 大路井村

- 一 貳百人 草津宿

ノ 四百老人

右者今度御普請被成下候川添村書面之人夫川上川下

へ罷出助人足之積ニ御座候

出人足

合貳千五百人

打合る上柳越堤山寺領迄川中百五拾九間卷尺貳寸

部田村堤

三月十一日御普請中為御見分 土山御立 草津御泊

御勘定御組頭吉見儀助様

御普請役御四人手附

小池小三郎様

同 下妻市蔵様

川嶋様へ先達而る御逗留

右四人様十三日川下留主川堤る川中打合迄御見分夫
る堤筋御引取御着之上郡奉行安見五助様御持参

御目録金五百疋御勘定様へ

三百疋 御普請役様へ

御見分相済候迄

十四日御立愛知川御泊り下妻様斗

十八日御立土山宿御泊り

吉見様目川にて

田楽の三十ち乃夢の蝶もきて

たかき名めしの菜にとまれかし

三匁包三十

一 九拾匁五分 吉見様へ

打合水戸三月廿日掛ル

廿一日

一 黒鍬 廿人 川中ニ而六間四方ニ上口堀

廿一日

一 同 廿七人

同

一 地鍬 九人

廿二日

一 黒鍬 廿九人半

同

一 地 七人

廿三日

一 黒鍬 廿七人

一 地 七人

廿四日

一 鍬

一 地

廿五日

一 (欠)

一 (欠)

廿六日

一 鍬 百四人

一 地人足 拾耆人

昼共

一 鍬

右雨天ニ付出水も難斗ニ付夜四ツ時迄相働川筋付ル

廿七日

一 鍬 廿四人

一 鍬

水戸打合川中ニ而川尻る耆丈八尺堀リ三尺四方之會所夫る北岡村道之方へ三間堀リ竹束小石等入会所る下五寸ニ四寸之松二寸板樋部田村堤下へ耆間耆本式間式本伏置当冬堤下堀割樋伏可致事
右取水止メニ相成候

四月七日砂川浚出来形為御見分

御勘定米野弥兵衛様

御普請役門原道右衛門様

川嶋鉄太郎様

土山御立當宿御泊八日御見分横町る堤筋打合迄打合る上へ御遠見打合る川中下へ御見分湖水迄夫る山田村木内小兵衛ニ而御昼弁当相濟道筋御帰リ八ツ半時御引取九日御逗留十日御立愛知川御泊

御着之上郡奉行

戸田二郎様御持参

御料理料

米野様へ金五疋

門原様

川嶋様 金五百疋ツツ

八日八ツ時西原長藏様御持参

御目錄 金三千疋ツツ三色也

右御三人様へ

右何連も宿方る金子相賄

文政十三庚寅年二月廿四日

大津御役所へ左之面々御召

草津宿

問屋 重兵衛

名主 治郎八

又五郎

村々役人

但

桐生村 小柿村

馬場村 大路井村

上戸山村 野村

下戸山村 上笠村

川辺村 下笠村

(注) 村名は便宜上

二段組みとした、

実際は一段

坊袋村

目川村

岡村

部田村

追分村

右之通罷出候処御白砂ニおゐて石原清左衛門様御口
達ニ而被仰渡候御請書之写

木ノ川村

北山田村

岡本村

山寺村

メ十九ヶ村

但草津宿

三人共上訴

差上申一札之事

東海道草津宿

問屋重兵衛

名主次郎八

又五郎

外拾九ヶ村

役人名前

去丑春草津砂川浚御普請之節前後取付等之場所宿村
々ニ而堤上置服付洩浚と自普請ニ取斗格別応立候普
請ニ而寄特之取斗ニ付為御褒美鳥目五拾貫文被下置
候旨水野出羽守様被仰渡候段曾我豊後守様御達之趣
被仰渡御褒美錢宿村々へ御割合御割合御渡被成下一

同難有仕合ニ奉存候仍而御請印形差上申処如件

文政十三年寅年二月

右三人

拾九ヶ村

大津

庄屋

御役所

年寄

連印

百姓代

差上申一札之事

草津宿

問屋重兵衛

名主次郎八

〃 又五郎

去丑春草津宿砂川浚御普請巾骨折其上自普仕立ニ付
遠路村々迄申合行届寄特之取斗ニ被思召御誉被為置
候様水野出羽守様被仰渡候段首我豊後守様御達之旨
被仰渡一同難有仕合奉存候
仍而御請印形差上申処如件

文政十三年寅年二月 本多下総守領分

東海道草津宿

問屋重兵衛

名主治郎八

大津

御役所

同 又五郎

維時明治三庚午曆夏享之

駒井

差上申一札之事

草津宿

問屋重兵衛

名主次郎八

〃 又五郎

去丑春草津宿砂川浚御普請巾骨折其上自普仕立ニ付
遠路村々迄申合行届寄特之取斗ニ被思召御誉被為置
候様水野出羽守様被仰渡候段首我豊後守様御達之旨
被仰渡一同難有仕合奉存候
仍而御請印形差上申処如件

文政十三年寅年二月 本多下総守領分

東海道草津宿

問屋重兵衛

名主治郎八